

P2-026

小学生の足のトラブルと靴の選び方や履き方に関する実態調査

柳澤 佳代、橋本 佳美、弓削 美鈴、鈴木 千衣、
柴田 眞理子、小林 睦、小山 智史、阿藤 幸子、
二神 眞理子

佐久大学 看護学部

【目的】

学童期は健康管理も含めて、生活行動の主体が保護者から子どもに移行していく。小学生の足のトラブルと靴の選び方や履き方に関する実態を知り、足の健康を守る教育プログラムの基礎資料とするため調査を行った。

【方法】

1) 調査期間：2018年10月 2) 調査対象：B小学校4年生の保護者129名 3) 調査方法：質問紙調査 4) 調査内容：子ども自身に靴を選ばせる時期、靴の選び方・買い替え回数、足のトラブル経験、靴の履き方、靴や足の健康教育の受講の有無である。5) 分析方法：記述統計を用いた。6) 倫理的配慮：所属機関の研究倫理審査を受け実施した（承認番号：第2018009号）

【結果】

回収数は105名（81.4%）であった。子ども自身に靴を選ばせる時期は、「高学年から」41名（39.0%）、「入学から」33名（31.4%）、「幼児期から」8名（7.8%）、「中学以降」16名（15.7%）であった。子どもの靴を選ぶ時に優先する事柄は、1位足に合っている2位歩きやすい3位デザイン・色であった。靴の買い替えは、1年間に1-2足が62名（59.0%）、3足以上42名（40.0%）であった。過去の足のトラブル有は47名（44.8%）54件あり、靴ずれ、爪が割れる、イボ、魚の目、巻爪、外反母趾、まめ、水虫であった。現在足のトラブル有は、14名（12.1%）19件で、トラブルの内容は過去と同様であった。靴の履き方は、紐やベルトを締め直して履く44名（41.9%）しない52名（49.5%）、踵をフィットさせて履く31名（29.5%）しない56名（53.3%）、踵をつぶして脱ぎ・はきを容易にする38名（36.2%）しない61名（58.1%）であった。靴や足の健康教育を受けた経験がある保護者は18名（17.1%）であった。

【考察】

保護者の7割が子どもに靴を選ばせる時期を小学生からと考えていた。学童期は生活行動が子ども主体に移行していく時期である。適切に靴を履いている子どもが半数以下であり、足の成長に合わせた靴が必要な時期であるため、保護者と子どもに対して足の観察や自分の足に合った靴選びの知識などの健康教育が入学時点から必要である。本研究は、平成29-31年度私立大学研究ブランディング事業：健康長寿〈佐久〉を牽引する「足育（あしいく）」研究プロジェクトの助成を受けて実施した。

P2-027

ハンドケア指導も含めた手指衛生教育方法の検討

太田 雪子^{1,2}、太田 雪菜^{1,3}、高垣 由美子⁴

¹おおた研究室

²東葛医療福祉センター 光陽園

³日本大学 松戸歯学部 学生

⁴NPO法人 蕨 児童発達支援事業所 コクーンファミリールーム

【はじめに】

手洗いは、感染症を予防するために最も基本的かつ効果的な方法である。流水と石鹸を用いた手指消毒が感染症を減らすために有効であり、手指衛生に関する教育が重要であると言われている。手指衛生について知識のある看護職などの医療職だけでは、障害児施設や児童デイサービスなど特別なケアを必要とする施設での感染予防は不十分である。このような施設では、施設に出入りし入所者に関わる保護者や保育士、院内学校の教員などへの教育も重要である。看護実習生を対象とした先行研究では、洗い残し易い部位が親指と手首と言われている。石鹸やその他の界面活性剤を繰り返し頻繁に用いることが、医療従事者の刺激性接触性皮膚炎の主な原因となっているとの報告もある。皮膚の損傷が起こると、ブドウ球菌やグラム陰性桿菌の定着がより頻繁に起こる。そこで今回、洗い残しを少なくするだけでなく皮膚炎予防を兼ねた手指衛生の教育方法を検討した。

【方法】

対象：児童デイサービス・生活介護事業所の職員、重症心身障害児者施設に勤務する教員、支援員、保護者

期間：2018年12月～2019年2月

方法：個人または2名から6名の少人数グループへの感染制御医による実習形式の指導を行い、自宅で振り返り学習できるように教材を対象者15名に配布した。学習教材は著作権法に抵触しないオリジナルの手洗い歌とし、CDと歌詞付き手洗い写真カードを配布した。指導効果の判定は、医師による聞き取り調査とアンケートを併用し、手荒れの評価は医師が目視で行った。手洗い歌の歌詞は洗い残しを少なくするだけでなく、ハンドケアの重要性にも留意した。質問の内容は「今まで医師による手洗い指導を受けたことがあるか」「指導前に比べて同じ手順で洗うことを意識するようになったか」「指導前後の手荒れについて（良くなった、悪くなった、変わらない）」「教材は役に立ったか」など全7項目で、研究の趣旨を医師が文書で本人に説明し、アンケート協力の承諾を得た。

【結果】

今回のような手洗い指導を受けたことがあると答えた人は皆無で、同じ手順に従うことを意識することにより、以前より手荒れが改善されたと答えた人が半数を上回った。

【結論】

ハンドケアの重要性に留意した手順に従えば、手荒れを起こさずに十分な手指消毒が可能だという事が分かった。今後は医師だけでなく、看護師などによる関係者への手洗い指導方法について検討することが重要である。